総合教育研究センター
学生向け情報誌
クレードル
21 号

CRADLE

Center for Research And Development of Liberal arts Education
21st issue

特別号
Special Edition

キャンパスにツリーハウス出現!!

2021年11月4日（金）5日（土）12月4日（日）の実習に参加した受講生の「体験記」をお届けします。

体育学部　Ⅰ年　泉山隼呈

私がこの講義を取ってよかったと思うことがありました。それは交友関係が広がったことです。私は部活をやっていないので大学内で大切な交友関係を築くことが出来ていません。今回のツリーハウス作成では周りの学生、先生方は初対面で不安ばかりでしたがなんとか仲良く作成に取り組むことができたことで少しは交友関係と言えるくらいには仲良くなれた気がします。それもこれも、何日もかけてみんなで協力して作り、それぞれの班で作った部品をくっつけて一つのものを作るツリーハウス作成だからこそだと思います。また、自分の新しい将来の一つに林業や建築仕事もありであることに気付きました。このツリーハウス作成をやっている中で、チェーンソーの扱いにも慣れ、繊細なこともできるようになり、木登りも早く登ることが出来たことからも自分にはこうゆう道もあるのかなと真剣に考えています。とても貴重な経験をさせて頂き有難く思っています。

17 年間続いてきたこの「森に生きる」の魅力に、今年のツリーハウスづくりは新たな 1 ページを開きました。「森」をキーワードにした協働する創造的・体験的な学びが、この全学共通科目に生まれました。これが、どこにもない、ここ天理大学にある魅力。私たちが考える「天理スピリッツ」だと、学生たちの声から確信します。（総合教育研究センター　竹村景生）

「森に生きる」の活動を終えて

国際学部　英米語専攻２年　辻川萌

初日の土台作りは何人もの力が必要で、最も大事な要となってくる部分であるため、細かな調整も欠かせませんでした。少しでもずれが生じれば、後々に響いてくるからこそ微調整が必要になってくるのだと思いました。二日目に足場(床)が完成して、そこでお昼ご飯を食べた時にはその見晴らしのよさに感動しました。予定していた二日間では最後までできませんでしたが、時間をかけた分、完成したツリーハウスに登ったとき、木の温もりを感じ、ハンモックに揺られながらほっこりとした気分になりました。

国際学部　英米語専攻２年　吹ケ心

チェーンソーを使う作業や釘を打つ作業、伐木作業など今回行った作業のほとんどは初めての体験だったので新鮮で、幸甚な体験だった。そして、実際に作業をしてみて、ツリーハウス作成は繊細でミリ単位の世界だと実感させられた。私は主にはしご作りに携わらせていただいたが、特にこの作業をしてツリーハウス作成の難しさを痛感した。今回は、２ 枚の板の間に踏み板をつけていくという方法を教えていただいた。これは、はしご作りの中では簡単な作り方だと伺ったが、踏み板の角度の測り方や、踏み板の幅に合わせて板を削る作業はとても集中力のいる作業だと感じた。ごくわずかなずれが、デザインに大きく影響してしまうことや、削りすぎてしまったら取り返しがつかないので緊張した。しかし、回数を重ねるにつれ少しずつカタチになっていく実感がありうれしかった。

人間学部　臨床心理専攻Ｉ年　松田愛子

私は今回のツリーハウス作成を通して、ツリーハウスを作るには、木の特徴を知りつつ臨機応変に作成するということを学んだ。木の特性や歴史、道具の使い方、垂直・平行に簡単に線が引けるチョークラインやチャップスなどの林業で必要な物も初めて知れてよかったと思う。短い期間だったが、立派なツリーハウスが作れて感動した。また森への知識を深めて、森について考えていきたいと思った。

人間学部　臨床心理専攻Ｉ年　矢﨑友萌

作業が行き詰りかけた時や想定よりうまく進まなかったときには、その原因や解決策について考え、試行錯誤を前提に実践してみることができた点が非常に心強かった。木材の張り合わせや屋根の波目の合わせは見栄えはもちろんのこと耐久性にも関わる部分であり、正確さが求められる部分である。特にそういった部分の作業に自律性をもって妥協せず作りこめたことで、ツリーハウスの完成に対する達成感や納得できる出来にもつながったと考える。

人間学部　生涯教育専攻Ｉ年　大伴勇二郎

作業している人がどうしたらやりやすいか、どの道具が必要かと考えながら行動していた。そしてサポートしながら作業写真を撮った。作業を頑張っている人の有姿、そしてどんどん完成していくツリーハウスを写真に収めた。

全然未完成だったツリーハウスがどんどん完成に近づいていくにつれて、作業している人の姿がカッコよく見えた。サポートしていただけの僕ですら、ツリーハウスを見ているだけで誇らしくなった。作業する人がいてサポートする人がいてそしてそれを見守る人がいるからこそ怪我なくなおかつ楽しく実習ができたと強く感じた。

人間学部　生涯教育専攻Ｉ年　徳田裕大

この授業を通して、森に対しての考えが変わったなと思いました。私は虫が苦手で、それで森は危険という自分はマイナスなイメージしか持っていませんでした。しかしこの授業をうけて小さな生き物も立派に生きようと頑張ってる姿がかわいく見え、森はルールを守ることと、それぞれの意識がちゃんとあれば安全だなとおもいました。というふうに森に対して楽しいイメージしかなくなり、プラスなイメージへと変われました。来年も是非参加したいです。今回の森に生きる無事におわれてよかったです。ありがとうございました。

人間学部　生涯教育専攻Ｉ年　若林秀浩

北野先生から木に登るための器具の使い方、「伝統的な昔の木の登り方」の説明や「木のぼり体験」など、初めて体験・知ることばかりで新鮮でした。その中でも一番記憶に残っているのは、木のぼり体験です。なぜかというと、自分の頭の中ではこうやればうまくいくだろうっと思考していましたが、実際体験してみると、考えてたようにしようとしても全然体が思うように動けなかったので、これをスムーズに上れたり下りたり出来る人を改めて心から尊敬しました。

人間学部　生涯教育専攻Ｉ年　田村哲也

ツリーハウス作成最終日、最後の作業はツリーハウスの屋根を取り付ける作業だったのだが、私は高所恐怖症なので作業にはあまり参加することが出来ず、これまた後悔が残ってしまいました。完成したツリーハウスは本当に立派で私たちでこんなに立派な物を作ったのかと思うととても感動してしまいました。このような貴重な体験は全国で探しても、天理大学でしか体験できないことだなと思いました。

人間学部　生涯教育専攻Ｉ年　岡田真依

「森に生きる」の集大成としてのツリーハウスが大学内で完成したことがとてもうれしく誇りに思う。ほかの大学内ではなかなか体験できることではなく、それを授業の一環として取り組めるということは素晴らしい体験をさせていただいたのだとツリーハウスが完成するとしみじみ感じることができた。ツリーハウス完成後には谷口先生が作ってくださったぜんざいを食べた。完成してからのみんなで食べたぜんざいは最高においしくてとても温かく感じた。みんなで一つの事を取り組むということは、こんなにも素晴らしくて感動することなのだと感じることができた一日だった。

人間学部　生涯教育専攻２年　金山真耶

はじめは、チェーンソーを用いて大きな木を横に切断することだ。これは、非常に難しかった。特に難しかったことは真っ直ぐ直線に切る事ができず曲がってしまう

ことだ。班の皆で交代しながらようやく切る事ができた。横に切った木材はツリーハウスの階段に使われ、切ってよかったと実感した。また、チェーンソーは最初怖くて使いたくもなかったが、長いあいだチェーンソーを使って木を横に切っていった経験からチェーンソーに対する恐怖が気づいたらなくなり、チェーンソーを使う事に躊躇しなくなった自分に驚いた。

人間学部　生涯教育専攻１年　的場孝太郎

僕の中で１番学べたことは人と人とのつながりでした。この授業には友達が多く参加していたのですが、その中でも関わったことのない人たちもいて、どうしても活動していく中でわからないことや手伝ってほしいことなどを仲間に頼まないといけない場面が多くありました。僕自身あまりコミュ力がないので、人に話しかけるということが出来ず、なかなかわからないことをわからないままで終わってしまっていることが多かったのですが、日に日に班やご飯でのトークから仲が深まり、わからないことを聞いたり手伝ってもらったりと森に生きるメンバーの絆が芽生えました。

体育学部　１年　林ツォンヤン

最初は先生たちが Zoom でこれからの実習授業について説明してくれて、そしてグループに分けてどういうようなツリーハウスを作りたいのかと一緒に話し合った。冬暖かくて夏涼しい、生活機能の良い仕組みなどのアイデアが続々出てきた。しかし残念ながらこれらのアイデアをすべて実現することができないが一番できたと思うのは私たちなりのツリーハウスを完成したということだ。ツリーハウスを作ることでは簡単な仕事ではないので専門家の指導がなければ我々経験のない人はあまりできないから幸田先生や北野先生の指導のおかけで私たちのツリーハウスができたのだ。

科目等履修生　甲斐大喜

世界的に有名なツリーハウス職人の幸田さんと北野さんが遠くから来られ、実際に大学構内にツリーハウスを作成しました。出来栄えとしては幸田さんも驚くほどの出来で「森に生きる」に新たな１ページを刻めたように思います。この「森に生きる」は大学の講義（座学）では決して学べないようなものがあると感じました。

また現在世界中で 2030 年までに温室効果ガスゼロを目標に動いています。日本もまた「ＳＤＧｓ　持続可能な開発目標」を掲げ人権や自然・エコに対し様々な動きが出てきている状況です。そして、まさにこの「森に生きる」という授業はそのＳＤＧｓに沿った、今後天理大学が重要視していくべき最先端な授業だとも強く感じました。だからこそ今後の天理市のため、今後の世界のためにももっと大きな活動になっていくことを願っています。

天理市は本当に自然豊かなところで、心癒され魅力あふれる街だと思います。これからも「ＳＤＧｓ構想　エコシティ天理」への多大なる貢献を楽しみにしています。

幸田氏のスケッチ（2021 年 6 月 作）

編集後記

年２回で発行してきた CRADLE。2020 年度は対面授業が出来なかったり、「森に生きる」の実習が中止になったこともあり春・秋合併号として、１回だけの発行となりました。その「揺り返し」とも思えなくもないのですが、今年度は３回発行する事になりました（笑）。ツリーハウスを作り上げた「森に生きる」の参加学生さん達の生の声をお届けいたします。（杉）

CRADLE(クレードル)　第 21 号　2022 年 1 月発行
発行者　上田　喜彦　天理大学 総合教育研究センター　　編集　仲　淳　　杉本　めぐみ
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050　　電話　0743-63-7092　(内線) 6111
印　刷　株式会社 春日